京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

平成29年3月17日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長　辻　井　昭　雄　様

所属部局・研究科　人間・環境学研究科
職 名　教 授
氏　　名　風 間 計 博

助成の種類	**平成28年度 ・ 研究成果公開支援 ・ 研究成果物刊行助成**		
研究成果物名	交錯と共生の人類学ーオセアニアにおけるマイノリティと主流社会		
著者・編著、作成者全員の所属・職・氏名	風間計博（京都大学人間・環境学研究科　教授）、飯高伸五（高知県立大学文化学部　准教授）、 柄木田康之（宇都宮大学国際文化学部　教授）、倉田　誠（東京医科大学医学部　講師）、桑原牧子（金城学院大学文学部　准教授）、丹羽典生（国立民族学博物館研究戦略センター　准教授）、深川宏樹（国立民族学博物館先端人類科学研究部　機関研究員）、深山直子（首都大学東京人文科学研究科　准教授）、福井栄二郎（島根大学法文学部　准教授）、安井眞奈美（天理大学文学部　教授）		
学術書・論文集等について	出版社・印刷会社等名	発行年月日	配　布　先
	ナカニシヤ出版	平成29年3月31日	日本文化人類学会、日本オセアニア学会、日本島嶼学会
データベース等について	公　開　方　法		公開年月日
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。合わせて、刊行・作成された研究成果物をご提出（ご提示）下さい。		

会計報告

事業に要した経費総額	2,392,956 円
うち当財団からの助成額	1,000,000 円
その他の資金の出所	無し

経費の内訳と助成金の使途について

費　目	金　額（円）	財団助成充当額（円）
組版代	847,000	400,000
製版代	286,000	150,000
刷版代	208, 000	100,000
印刷代	269,000	100,000
用紙代	343,000	150,000
製本代	257,000	100,000
消費税	177,256	－
合　計	2,392,956	1,000,000

当財団の助成について	人文社会系の研究者にとって、単行本出版はきわめて重要な研究成果であり、社会還元でもある。昨今の出版事情の厳しさを鑑みて、貴財団の助成は学術的な貢献が大きい。出版助成が取りやめになったというが、是非とも復活して頂くことを切望する次第である。

成 果 の 概 要

風 間 計 博

１．刊行まで

本書は、編者が代表として組織した、科研費基盤研究(A)「太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する人類学的研究」［課題番号 23251021］（平成 23 年度～平成 26 年度）の成果をまとめた論文集である。助成金申請時点で各執筆者は、原稿をほぼ書き上げた状態であったが、助成決定後に編者が全ての論文を再チェックして、執筆者に書き直しを求めた。平成 28 年 5 月に個別論文をとりまとめて、形式や用語の大まかな統一を行ったうえで、出版社に入稿した。その後、校正を重ねて平成 29 年 3 月に無事上梓することができた。

２．本書の目的

本書では、オセアニア島嶼部における実地調査で得た具体的事例を提示しながら、在地の論理のあり方を考えたうえで、交錯した現代世界における、人類学的な共生の論理を追究することを目的としている。あらゆる人間の営みに排他や暴力が必然的に伴うにせよ、オセアニア島嶼部の生活実践や在地の論理から、軋轢を緩和・消失させる実践論理を追究する手がかりを得ることを目指している。

具体的には、ポリネシア・ミクロネシア・メラネシアにおけるマイノリティの共生とその交錯を主題とし、歴史的過去から現代に至る移動と「混血」、性や障害者、記憶や感情といった概念を軸に据えた諸論文からなる。ここでとりあげるマイノリティとは、外来の移民、社会内部において有標化される障害者や LGBT、さらには通常、主流社会の側に含まれる女性や高齢者までを包括的に捉えている。換言すれば、マイノリティの語は、他者カテゴリーとしてステレオタイプ化される人々を指示する場合、あるいは、有標化によって他者性を付与される個々人を指示する場合がある。

このとき、人々がいかに自他を弁別してマイノリティが作られるのか、あるいは、いかに差別や排除が生じるのかが問題となる。差別や排除は、他者に対する攻撃性や暴力と不可分である。逆に、集団的自己がいかに他者を取り込み同化させるのか、差異と共存がいかに維持されるのかを問う。

３．本書の概要

在地の実践論理としての共生の様態は、歴史的変遷を異にしてきた諸社会により多様である。本書所収の諸論文を読むと、オセアニア島嶼部の人々はグローバル化の時代に、交錯した現代世界に引きずり込まれ、あるいは自ら深く関わっていく途上のようにみえる。

「序章　現代世界における排除と共生」に引き続き、三部に分かれる全十章では、オセアニア島嶼部における多様な実践論理の事例が提示され、現代世界における共生の可能性が示される。同時に、グローバル化によって隅々まで波及した、圧倒的な西欧近代的論理のなかにあって、新たなマイノリティが生成する現状が看取される。

「第Ⅰ部　移動する人間と『混血』」では、ヨーロッパ人とオセアニア島嶼部住民が初期接触した後、植民地化を経て独立し、現在に至る歴史経緯のなかで起こった人間の移動と、必然的に伴う「混血」や同化／異化について論じる。近年のグローバル化の起こるはるか以前から、移動する人間は他者に出会い、戦い、交渉し、協働し交わってきた。そうした歴史の刻印は、瞬時に消去できるものではない。日常的には不可視の痕跡として残り、ときに偶発的な契機によって顕在化し、現代の問題として水面に浮上する。歴史的変遷のなかにあって、オセニア島嶼部の在地論理としての共存のあり方が、新たに見出される。

「第Ⅱ部　新たなマイノリティの生成：性・高齢者・障害」では、グローバル化の進展に伴う、近代的論理の導入による社会組織の再編と在地論理の変質や維持が主題化される。グローバル化による交錯状況が、明示的にみられる事例が紹介される。近代性は、メディアと人間やモノの移動を通じて、疑似普遍的な論理や制度をオセアニア島嶼部にまで強力に普及させてきた。そのとき在地論理は、単純に解体されるのではなく、ときに強化され、ときに内実を変質させられながら存続する。この過程において、新たなマイノリティが生成し、また名づけられながら、権力関係が再編されていく。

「第Ⅲ部　差異をめぐる記憶と感情」では、人間の心理的な揺らぎが及ぼす生きた効果を射程に収める。過去の経験や感情の共有が個別の文脈において人々を動かし、共存へと向かわせる力を内包する事例が示される。近代的思考に基づいてカテゴリー化された、マイノリティや主流社会を前提とするのではなく、個別の感情的経験に基づく自己と他者との関係を見据えることにより、西欧近代的な共生概念の枠組み自体を問い直すことになる。

オセアニア島嶼部におけるマイノリティと主流社会の多様な関係のあり方を見ると、脱植民地化、そしてグローバル化のなかにあって、従来は親族や村落内部に関係づけられてきた人々が、近代的概念の侵蝕と社会経済変化によってマイノリティ化する事例が見られる。ただし、西欧近代的な人間観の卓越によって形成されるマイノリティ化は、むしろ稀である。オセアニア島嶼部における在地の論理は、内実を変えながら再編し、再活性化されている。そこでは、多重で曖昧な帰属の仕方や、複合的な人間観、「血」の共有や交換の実践により、自他の区分や敵味方の弁別における境界線がときに錯綜し、無化されることもある。

自他の弁別様式が変形され、状況に応じて属性を適宜組み替えていく交錯した状況において、いわば、境界線の非決定的な柔軟性が色濃く見いだせる。このような曖昧さを含む在地の論理が、近代性の内包する自他の峻別と過度な排除を攪乱するうちに、人類社会における共生の仄かな可能性を垣間見ることができるだろう。